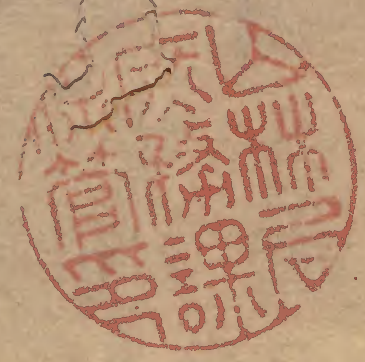


前大津宰判  
長門國大津郡風土記

深河村  
二九

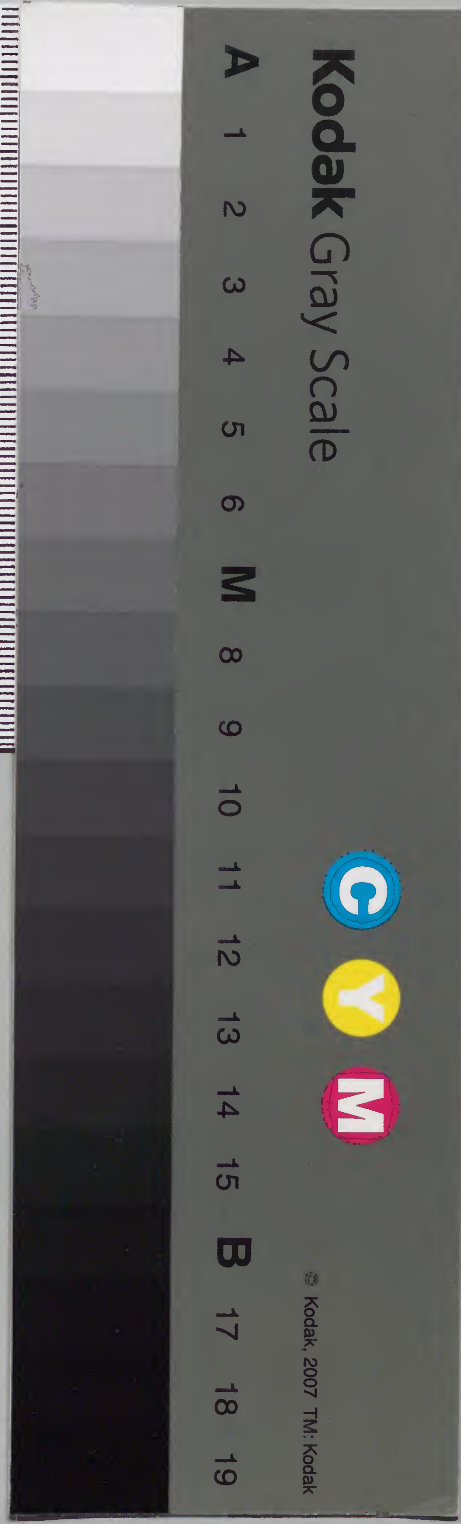


農商務省  
四〇九三號  
一八冊

和書門  
三〇二五號  
二一〇函  
一三九冊

内閣文庫  
和書  
三〇二五  
一三二冊  
一七八架

|      |          |
|------|----------|
| 内閣文庫 |          |
| 番號   | 和 30025  |
| 冊數   | 121(100) |
| 函號   | 175 194  |



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



假第三の號

共一八

美濃郡判

長門國大津郡風土記

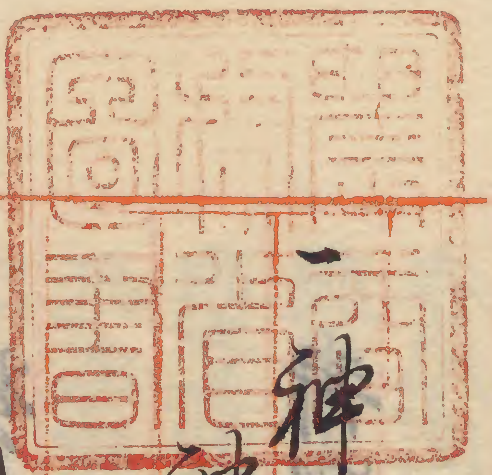
九

深川村武



*[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]*

神祠  
M.C.  
M.16



神祠  
神祠辛酉年

八幡宮  
江良村

祭神三尊

譽酒別天宮  
足仲次天宮

大足姫命

古殿

三女神  
天鷲鶴天宮



神殿 三寸四寸 流被風之戸九寸  
重垂木二寸 尾根蟻股木  
鼻造 四寸 椽字 欄芽替  
祝詞殿 入三寸 椽三寸 半大戸替  
木造 左右椽字 欄尾替  
幣殿 入三寸 半椽字 半大  
戸替 木造 左右椽字 欄尾  
替  
拜殿 入三寸 椽五寸 半大戸替 木  
内室造 重垂木 破風 左右椽

字 欄芽替  
車寄 入三寸 半椽字 破風  
造 三寸 半鼻蟻股 半木替  
右出棟 共蟻股 鬼板子  
三寸 墨の所 破形 上但所 楕  
形 三寸 替 取 椽 の 所  
三寸 銀三寸 月 起 三寸 下  
其 外 出 之 山 三寸 竹 木 採  
用 註 記 付 候 交 子 三寸 中  
候



神皇正統入載百核之百卷尾卷  
神代卷初約之百卷尾卷

社傳

長門國大津郡深川庄八幡宮者往昔人  
皇四十九代光仁天皇室龜頃及深川流  
未當北之於滄海原而時有光狀如電  
光或時此海有渡船光邊漂流乎瀛風嘯  
而波忽然起船溺苦無由可生船長者  
服脫而于海掩之則迅風自然還甚年乃  
名此所云洞服出也而後皇室龜三壬子歲

三月十四日夜老翁現而上田宿禰告曰  
我者是從豐國宇佐末現此之海底乃年  
數汝思無邪也速可皇此地跡神託新而  
沉光于海因茲宿禰清淨潔濟而乘海士  
之小舟浮荒薦于海原於是獲三御玉感  
嘆而拜敬之武薦沉于海而為底盤号曰  
石藻生底盤矣於茲御玉擊深川西池之  
邊敷於薦而勸請號云薦池八幡宮其池  
今尚存而御玉深川洗於水末乃號其所  
而云水谷所則三神之御玉水谷所之奉



與吐海濱却屋是則國家洪福五穀豐饒  
之尊廟也人皇五十一代平城天皇大同  
二丁亥歲八月上田宿禰登于朝奏此神  
之威德故勅命而改舊廟奉移飯山殿建  
鎮哇矣此神光華明彩照徹於六合之內  
諸人奉崇敬為郡每頃頭無不蒙其撫衛  
也人皇八十六代四條帝曆仁元戊戌年  
八月十七日大風遽起折木神宇悉敗頽  
而後宣而造之建營已成粵仁治二年丑  
八月十四日祭新廟自然己未祀不斷云

其神德可云勝哉故雖晚世崇此神則除  
貧困疾病生富貴聰明万民安全之靈廟  
也雖有古籍有不明故聞故老之言編  
此籍又通讀也

永和二年丙辰八月朔日

當社上棟銘

嘉吉三亥八月當國守護代鷲頭肥前守  
弘忠造營

又



奉棟上深川庄八幡宮御室殿一宇造立事  
右意趣者奉為天長地久御願圓滿天下  
泰平国土安穩別而地方大檀那息災延  
余福祿壽生之子孫榮樂家門繁昌殊者  
蒙十方施主資助為再興之願勸信男信  
女貴賤懸口願主二六時中心之本願有  
之祈子孫繁昌二世願望重乞子葉皆入  
潤屋孫枝悉榮福遶各中所願皆令滿  
故也

永正五年戊戌四月十二日

地頭正為  
多々良興定  
地頭代為成  
願主資好  
勸進沙門聖須并  
聚福院朝海僧都  
納所 祐秋  
時之檀那藤原重延  
大官司上田内藏兼久  
光



大工藤原宗重

鍛冶 信吉

又

浩々靈德 颯々神風 和九重施 威  
四海通 共惟夫神明也嘗岳跡於男山  
石清水而顯八幡大菩薩矣千爰傳言長  
門州大津郡之於北海上無陰无陽光明  
赫耀不夜者凡八百歲餘或時託曰吾是  
八幡大士也為國家擁護兵革偃息岳跡  
多歲也矣於茲民競有渴仰之丹誠使安

置靈席於深川阜頭而為石清水之附庸  
或時託曰尋于河脉濫觴在活蘭若為受  
其餘流脫五臟莫散別流酌尸祝怖畏而  
成奇異之思告行居師之密居佛心壽神  
慮譬如水波離水無波離波無水云神云  
佛畢竟無別無斷故去于當尸祝鄉內之  
長吏屬再興之志購他家衆緣罄屋裡資  
糧不終日完備矣

于時寬永龍集 甲戌八月 貳正日

裏



御寶殿一字造畢

殊鄉內平安防怨敵於他方集瑞祥于此  
界果穀圓熟人民忻怡也

鄉內長吏各乞安穩

大工賀兵衛小工拾人等

大寧缺村書之

又

謹奉再興

八幡宮拜殿一字

長洲大津郡深川庄當社者從往古公家

武家不依寺社到士農工商造營無怠轉  
遂其節畢然者及世澆季殊其沙汰累年  
退轉速月廢壞亂軒兩侵被壁草應而如  
漸顛倒矣爰鄉內之<sup>美</sup>老勵再造志願矯  
謠家處緣穀已家登糧不日完全為併神  
冥佛陀之感應靈宣合同共力貴賤助緣  
他方之素絃半錢一稻寸鐵天人之徒現  
世蒙神明之擁護誇富貴自在樂到當未  
者遊於已天近之都者矣

寬文庚戌仲秋之正月



鐘之銘

長陽大津郡深川庄  
八幡宮在地不知其所初蓋有天正丁丑  
驚頭多々良朝臣廣盛所奉華表文祿年  
驚頭多々良興定之改造拜殿之文自是  
而下往々御民向謁長為窮鄉之鎮及至  
今某父子侵木躋之罪作小鐘一枚以自  
祈自今後生之福遠祈愚子孫之繁又為  
不當之思願鄉園之化樂土蓋聞古有一

口之鳧作至慶長年中終喪失今鐘樓之  
基石猶存伏悲以蓬戶艸食之身共昔疇  
夜冠人傳名千歲誠天意之所寧安而人  
心之所戰也雖然靈社之在此地深結民  
心吏无勝說又何有所擇歟乎

銘曰

黃鐘始理

神人以和

天和二年 壬戌秋八月

在歷考 上子出及上棟の文永



正以之と後世の擬造あるを  
寛永以之と古色顯きを疑ふ  
へくもあらず志うし擬造るま  
と口実を述べるを採る或は古  
物を写し傳へたる類とある  
と後ちよ採へ起りも何れに  
摺寫家と大内系圖を採る  
盛房の男弘盛の身よ摺寫  
三印後但る守盛保の裔よ  
弘前守弘忠初盛弘隆弘隆弘法弘法持

世の代より去り守後代の穢あり  
守後代記よ

卅丑大内刑部少輔持世号澄清寺殿從四位下周防長門豊前筑前大守之永  
享四年四月二十二日入部

守護代鷹頭肥前守盛範小守護代  
圓山因幡入道道深執事圓山左近  
將監氏兼

卅六大内六郎教弘号闍雲寺殿之永享  
十三年入部云々



守護代鷲頭肥前守弘忠盛範云々

まゝ大寧寺中法書の中

文安五年丙辰二月十七日檢校法皇

公同姓教弘公の爲は深河の城

に於て戦死す

なとありて永享の比より文安

と到りて守護代きりしと著り

まゝ此邊の神祠佛院より中法

より入る理あり後天正の御代

盛文文禄より多し良具定と云右あり

あるに弘忠の裔此邊郷に深き

恒々本藩より是より移りて

殖る人々の族ありし

社帳

石三石 御入

石六斗貳升給帳

右の通記附録也

年中御祭式

正月三日の御神供神酒



禊進高初禱元大晦日より  
三日の夜まゝ大宮神社  
麓日七七日七種粥禊進日  
八日疫神祭日十五日爆竹  
日夜より十六日新追子  
中社冬日待靴新地下役  
人中神酒神供告頂裁  
同日神供餅之二月節日  
神供神酒禊進日十五日  
歳陽祭三月十二日より十

八日追妻祭靴新神書禱  
秋満日神告村役人供草  
四月十五卯月祭庭燎  
神楽五月日浪不同五月  
蟻送り神交六月晦日石  
越後神告茅の輪を掛  
冬詣のくまをまゝ  
七月晦日神楽流八月  
十一日悠基殿を船で送り  
本社掃深の内神を



件の修殿は勸修しなり  
神供廻進掃深お淋神  
送法名同十五日の夜庭標  
所湯立所祈禱十六日流  
禰子の武瀨宮へ神衣  
五ヶ村より花鳥五足立出  
又板持水月村の百姓上田  
又花鳥門と申者より立鳥  
帽子素袍の類ある物と云  
しるは系供養仕り是を

心正卿と書て去やりの馬と申  
来り作所縁訪は於て社  
家同様は頂戴物仕り  
所月代と云ふ所代官訪  
よる所出法地下役人中  
供奉は所縁訪はて神供  
神酒等頂戴仕り十一月十  
五日路誕生十二月前分祭  
同晦日際夜所饗大宴  
司社新所祈禱仕り毎月



式日丑節供考のよそ神供  
神酒初進守祚延長  
上御武運長久御玉家安  
全の御祈禱仕石  
青雲院様当地へ湯湯  
は新遊而下湯不温泉の  
湯を長井了意と申志の  
完へ飯取新御付新遊一  
入湯石節社取と於て一  
七日御祈禱新御付御奏詣

の御神楽執行御供物  
考石之神皇新出御  
出取飯尾助之清炊を以  
御意の旨新御渡石  
觀光院様延享三宮二年  
湯本御入湯の御結山  
よおひく松御家先新遊  
の御祝と一々御祈禱の  
上御石代新石之松と  
壺の畫の御願新遊御







此等之書乃私之祖之書也  
禱子如祭禱也禱也禱也  
教也之

御月之社也

所之祖禱也法及後禱也  
此等有邪之社也  
所許容也社也  
宜也社法也

享保七 深川八幡宮神也

宣三月 上田内苑元

為神武天皇

有通而領也  
禱物也

此等之書乃私之祖之書也  
禱子如祭禱也禱也禱也  
教也之  
御月之社也  
所之祖禱也法及後禱也  
此等有邪之社也  
所許容也社也  
宜也社法也  
享保七 深川八幡宮神也  
宣三月 上田内苑元  
為神武天皇  
有通而領也  
禱物也



物致付牙殿其邊成心分一併附  
類三條等邊先以得之念心等物  
沙法之念心者長此河内致付等邊  
市紙也之類念沙法之類法給之類給  
之念沙法の念心

八月十三日

兼井左乃取 山田右之清  
和智之清

此訂燈殿之及後出治村の系

法留地類之念心海法の念心

享保七年

八月十三日 兼井左乃取

安室右乃取

其邊海法沙法如最燈來心也  
改和年中一統之海沙法之  
給之念心也給之念心天保十  
美之海致舊日記古類之念心  
心分之念心出之改之海沙法  
可致以付之の海子之付海



於此上之

大官司家筋而仕奉

雖古之嘗地の綿立りて

之申り処八幡官源流の初

社祓と成神交執の仕

来り処依

衣命神祓統言回配下り

付る是神道裁許神初重

仍法由授官位昇進後記

只宣敷代頂裁法来り是社奉

辛始

御月見是治行手取而祈禱

物而系禱而祈禱物考節

且又

而代々様而國廻而入湯者

の節法祈禱物兵之是是

而社奉り節中奉表込而

法出石披露り

御月見是治行手取而祈禱

物而系禱而祈禱物考節



中門

西靈社神祇社員供奉遂  
平神石

深川八幡宮赤湯社

大宮日

上田遠江

祠堂

上田左中

赤湯社

江長村に在

保食神

三女神 天孫人神

神殿

造 造 造 造 造 造 造 造 造 造

柱重木被風造 柱重木被風造

右椽字欄造

祝祠殿 入 造 造 造 造 造 造 造 造 造 造

造 左右椽字欄尾造

幣殿 入 造 造 造 造 造 造 造 造 造 造

左右椽字欄尾造

相殿 入 造 造 造 造 造 造 造 造 造 造

室重木被風造



車寄

入言の換言の三石朱泉

養股造為本題

社傳

當社所結望の厚扶部大

海赤海社を勧請の由

と傳の年月不知

祭日二月二日より八日まで

馬祭高祭

六月廿二日五穀豊穰祭八月

九日十日神正祭十一月廿日新

穀祭

八月十日神正祭の神由所七

ヶ村より寄進踊仕出の儀

古よりは集候

南條涌

湯本村

新祭意

喜人

白木綿袴巻類髭胸當白

地帷子袴は梅のおねふ

兜の模様朱鞘の大小刀は

文取を附く是をとうと



平履脚中足袋草鞋襪  
に螺貝を附花圍扇を  
持

吹世持大輪ト 武人

御卷類髭胸当絆除の字物

袖より子持筋脊中より束収

履斗の模振より霞脚中足袋

草鞋

大鼓打 武人

袷卷類髭胸当白帷子脊中

又束履斗の模振より霞脚

中履より大被を附

編木門 武人

又及右被おより目一首より

編木を掛

撞打童子 武人

唐人笠高木綿月社の

單物月色股引たくり

帯より霞足袋合をさぐり

持



右六人は是を中簿と号し歌を  
唄ふ

側簿 式拾八人

菖木綿新巻類髻酌當白  
地帷子打貫の紋朱鞘大小  
と襪脚は足袋草鞋花圍  
扇を持

短冊 短冊は五色紙の  
短冊を好む 二本

ら 一法

袂袍 二挺

繪 三本

襪 四本

右拾貳人いしきと得着板書  
る

歌

とくまはしひ代え

のをな哉よりエ

白金のく菫よ小鳥を百

いさく白砂を掛へ歴む

エ



浪者のく松よ小響う葉  
を懸て遊子所阿う足  
交くトウエイ

六角殿うちんとう坊へ  
の引出物まそ河うの先  
一表又獨站三站終揚杖  
花瓶香燭燭臺六月祝慶  
祝燈紙唐様杉原たんと  
ま引合せ唐の掛繪う三幅  
一對お引やうくトウエイ

ちんとう坊う六角殿への  
引出物まそ河うの先一表又  
是精毛箱毛河原毛雲  
雀毛鶴毛共是四白願白  
右島搦くまお引やうく  
トウエイ

宮崎のく深山の時雨ハ  
よの雨濤水くも麻毛  
獨ゆくらんトウエイ  
浪河のく唐の深きの観



紙を神も濡さばさるる  
ふらぶらより  
空立鳥も席はる席せ今  
をど響より  
山伏のく腰よさげさる  
からの貝一吹ふけて圓り  
活るより  
おきやま若公衆か船中そ  
明き冬より又まのり明き  
まのり又まのりより

右七月晦日當座より浪連を張  
地中級人立合社人申請祈禱  
仕八月朔日所化割夜中打  
合と同日花造りより中踊道  
具飾立仕夜中打合せ同  
九日花搦より大寧寺へ  
押出湯見物より入湯り金  
昆羅社前より踊り同十日  
井口より然りより當社へ



押入浦の中元正政市浦隔  
年の一に敷浦来り共迄  
年正政市の浦止る身来  
浦と云ふ後浦と候お跡  
八幡宮より浦端り湯本  
村平川治右衛門方より  
浦と云ふ来り身の理治と  
云ふ浦望り

在履考 南條浦と云ふ春公  
の御軍築より岩田御吉例

又述りし。越後より越中へ  
よも傳へし。は信山村の  
條と委し。出せるを考り。下  
彼村よと傳故と述し。浦と  
中絶し。趣なり。當村より  
そ傳り。委し。の。と。今。と  
一毎の御系式よりその浦を傳  
り。より。當村の條と息を  
し。略志系より備へんと。以。方  
遙曲を彼村の條より。出。又





河内 河内 河内

南条踊の図

こゝろ出流の類を  
 半道と云ひよ  
 あまを彼も是もその  
 此まゝに出し  
 備考と云



月系冷楽 華表潜り  
 荒の子波 厨鶏

糸海の石

中山

江良 彦中

小川 西上村

中郷 上川西

殿ヶ屋 上郷

大河内 小河内

板持 河原

糸海五組





獅子の洞入

洞入

針人

宝冠とP黄くを造る花  
敷百を五色の紙より調  
へ裁き法被とP裃の赤  
き衣をよみ大口をよ紙腰  
輪とP五色紙をより  
飾りたる輪を腰に附腰  
被摺を拵

大團扇造り

針人

黄笠帯刀袴を懸をよき

大團扇を拵

杖をよ童子 針人

袴を霞脚を色紙よき丸

巻く杖を拵

疋打

拾人

管笠を五色の切さげ紙を  
附腰輪を拵疋打

右虫樂よみ小大方同様正座帯  
踊りよ前を五樂中を踊り



作ハ其作多ク南條通と  
二三ノ通ハ不化割日ノ外  
南條通同様ニ其通也

三妻續正成年

花通通通通

七八歳より十二歳までの

童五六人髪髻を以てし

赤き服より白の裡を附て

る在る花笠などを持通

る

三妻續正と申七十歳より

十五歳迄の童ア通也

組之年々替り也

右三妻續正姓古より寄進

以来作ハ其所沙汰の類也

此所迄也其より以後

在る事故書也

在履考 此より通と云ふ三隅

村ハ懐宮の條ハ腰輪通也

と云物也同く 医房公



御作の洛陽回楽記の回楽の  
回互物あるべし其回楽の  
曲の石の中は腰鼓編木柱女  
ふと云うあるを思ふべし  
此は島は管笠を被りたる  
こ殖女の簾風とも云へく又  
腰鼓を則回は其の振し  
る者あり或は編木を振  
る様も又ゆきて被毛を  
振したるものと思はる終に

隅村楽を考ふるべし又回  
楽と云物の祭りに大嘗会亦多  
治比氏の内舎人等うけなる  
回儻といふと延喜式に見え  
そまふの藝を撰したる物  
やその大嘗会との回儻も  
こ村里は因子考りて回強果  
て祝ひ歡ひ哥ひ踊し様を  
うそ船延の御大礼は祝を  
へるものありしは大神宮



の御回殖は四條は律と云ふの  
儀式帳もあるをいへる御入り  
あり然きこそ藝の本を思ひ  
て回殖の糸の意あるは後訓  
梨よ

或は神糸を折て申糸と  
申糸を割て回糸と云ふこと  
云々  
と云ふと却て誤ある人回糸と  
古く申糸と後あること

楽誦の忌

此誦の図は或家よ為る  
屏風も画る図は扱ひ  
御う近世の意を加へある  
なり







光神祇社

正明市子町

祭神三尊

子龍神

鬮龍神

神殿

音呂中四角尾延日

祭日九月十八日十九日

天満宮

湯中園子社

祭神

菅原公

神殿

音呂四角

菅原





相殿 武内宿禰

祭日十月十五日

上田遠江 持持

上田左中 持持

河内社

大河内子社

祭神二座

猿田彦大神 宇須女命

相殿 武内宿禰

祭日十月十五日

車寄 入四殿横倉三層奉股造

尾造

祭日五月五日九月九日十日

渡娘社

殿之卷子社

祭神一座

虚空比賣命

相殿

仁徳天皇

相殿 杉乃三右衛門守兼



車寄 入四尺積高白茅簀  
祭日九月九日十日

天神社

湯本三谷子社

祭神一尊

少女名命

神殿 式乃四万茅簀日

祭日十月八日九日

赤塚社

板持子社

祭神三尊

保食神 三女神

天照大神

神殿 入式乃半積高白茅簀日

相殿 入式乃積高白茅簀日

車寄 入四尺積高白茅簀股

造瓦造日

祭日九月十日十一日

荒神社

横川子社



祭神一覽

武素盞鳴命

神殿 壹百四十九疋

柙殿 入三疋換貳百茅疋

車寄 入四疋換壹百三疋兼股

尾疋

祭日九月十六日十七日

素神社 同初子在

祭神一覽

素盞鳴命

神殿 貳百四十九疋

祭日二月五日

程規社

祭神三疋

侍時諸尊 侍時冊尊

菊理姫命

神殿 入三疋換貳百茅疋

車寄 入四疋換壹百三疋兼股



祭日九月十二日

八幡宮

綾浦子町

祭神

意神天皇

神殿

延喜式神代卷卷第

根殿

入式百字核三層層木造

瓦葺

祭日十一月十五日

右八社

上田遠江抱

大神宮

御新原子任

祭神

内宮 天照皇大神

外殿

天手力雄神 弟幡世秋津原神

外宮 豊受皇大神

外殿

天津彦火瓊杵尊 天照皇根命

天太玉命



神殿 入式者換式者中三戸造

茅葺兩官共同様

幣殿 入式者半換式者半尾葺

扨殿 入式者換式者半尾葺

神系殿 入式者半換式者半尾葺

車寄 入式者換式者半尾葺

唐破風造

而新禱殿 杉行六宮梁行三宮茅

葺

延喜廿月十九日廿九月廿五日

社傳

延喜より勸請より年

月日書委しと分る

尸

恭植院様寛文年中當

部へ御寄書に新遊馬中

口部此辺より續一箇新

遊馬也尚由様南社へ御

奉納致し給

請茶院様南社へ御



將又新造所中<sub>中</sub>前所翁  
先所祝と<sub>と</sub>高社へ  
所願所翁附所作付と<sub>と</sub>外  
よ<sub>よ</sub>様方當部へ所湯治  
考又新造所中<sub>中</sub>前<sub>前</sub>所  
参詣<sub>参詣</sub>と<sub>と</sub>新造所初穂考  
神納所<sub>所</sub>付<sub>付</sub>所造管所<sub>所</sub>  
覆考<sub>覆考</sub>と<sub>と</sub>地下<sub>地下</sub>悩<sub>悩</sub>と<sub>と</sub>寛永  
元<sub>元</sub>年<sub>年</sub>所再建宝永五年  
所再建の棟札あり安永

四年所初覆の節<sub>節</sub>と當所  
宰判<sub>宰判</sub>より<sub>より</sub>詔<sub>詔</sub>付<sub>付</sub>板<sub>板</sub>先<sub>先</sub>大  
津所<sub>所</sub>宰判<sub>宰判</sub>より<sub>より</sub>同<sub>同</sub>板<sub>板</sub>  
神納<sub>神納</sub>所<sub>所</sub>成<sub>成</sub>且<sub>且</sub>又<sub>又</sub>所<sub>所</sub>考<sub>考</sub>の  
節

長府公より<sub>より</sub>詔<sub>詔</sub>付<sub>付</sub>板<sub>板</sub>及<sub>及</sub>米<sub>米</sub>預<sub>預</sub>儀  
所<sub>所</sub>寄<sub>寄</sub>附<sub>附</sub>所<sub>所</sub>付<sub>付</sub>の  
神<sub>神</sub>と<sub>と</sub>家<sub>家</sub>初<sub>初</sub>所<sub>所</sub>成<sub>成</sub>  
先<sub>先</sub>祖<sub>祖</sub>公<sub>公</sub>身<sub>身</sub>手<sub>手</sub>板<sub>板</sub>  
所<sub>所</sub>月<sub>月</sub>足<sub>足</sub>所<sub>所</sub>付<sub>付</sub>と<sub>と</sub>板<sub>板</sub>所<sub>所</sub>成<sub>成</sub>



の節由緒米薪上は是又  
上之標方由部入部  
新遊の節中由新物  
節上は

深川八幡宮赤坂大社  
兩社祠官由新大社  
濱浦妙見社友社神  
上田在中

巖嶋社

大進原社

祭神三

市杵御魂 恩非命

瑞津姫命

お殿宮人社五

天忍穂耳命 天穂日命

天渟彦根命 天渟彦根命

熊野禰日命

石祠

祭日年中三度執事



妙現社

淡浦子社

祭神一柱

小斗之靈

お殿

恒吉大神

猿田彦大神

秋葉大権現

金毘羅大権現

神殿

式石四角屏末造尾簀

御供所神殿

下より一

六疊

神楽殿

式石横三石尾簀

車寄

入寺石横三石尾簀

祭日 二月七日より十三日まで

四月五日より五日迄九月

廿二日より廿三日迄

在歴考

妙現社都流部中

松子祭まじり権輿とて松井

の妙現是なり由流河に大

内家代に伝御ありしと著く

人により祭まじり是を

當村に祭まじりて彼下松の邊



神皇正統記家歴世の願知より後山  
殿教訓の代神皇正統記弘忠の時よ  
至り妙見社再興のとき系譜亦  
とよも見ゆきし弘忠守護代  
として下向のまゝ勸禱あり  
つゝんと疑ふへくもあらずと  
御うけ過る證拠とまゝに傳説  
ありとせば憾あり柳井の妙見  
の辺神皇正統記の所願ありし  
とて神皇正統記の号もとそこの地

谷より出たり妙見社割れよ  
禁制 用防國都濃郡神皇  
妙見山

右甲乙考南山よかむく將  
の交々菟苗將考よ至る永  
禁断せしめ果自今以  
後若此制符をそむる違  
犯の處よりあらずハ罪科よ  
當りしとの御也件

寛仁元年四月二日 多良朝臣判



本之河を以て知るべし

恵比酒社

同浦子河

祭神 彦

事代主神

蛭見神

神殿

入寺為守換寺為守為替

社傳

元祿四年孫津園西宮より

勧請の由中傳り棟札あり

之石

祭日九月二日三日

大歳社

小郷子河

祭神

八将神 素盞鳴神 杵津姫神

お殿

罔象女神

天村雲神

神殿

入三尺寺換三尺為替

お殿

入寺為換寺為守為替

祭日九月廿日廿一日



嘉神社

上郷子社

祭神三座

澳津彦神

澳津姫神

土御社神

神殿 入彦与宇栲彦与尾彦

祭日 九月十九日 廿日

四王社

江良子所

祭神四座

持国天皇

廣月天皇

增长天皇

多門天皇

お殿二座

事代主命

高良玉彥命

石祠

楠の古木所

祭日 九月九日 十日

嘉神社

同村子社

祭神三座

澳津彦神

澳津姫神



古御祖神

本殿

倉稻魂神

神殿

入三尺五寸横三尺芽殖日

本殿

入貳尺横貳尺芽殖日

祭日九月十一日十二日

黄幡社

上川西子在

祭神二尊

建御名方神

大己貴神

神殿

入三尺五寸横三尺芽殖日

本殿

入貳尺横貳尺芽殖日

祭日九月十日十一日

若神社

同村小所

祭神三尊

瀬津彦神

瀬津姫神

古御祖神

神殿

入三尺五寸横三尺芽殖日

祭日正月七月九月日限不定



黄懐社

上野原に在

祭神二尊

建御名方神

大己貴神

相殿結魂社祭神

八神殿

神殿

入彦名速津彦名茅渟彦

祭日九月十九日廿日

大歳社

下川西に在

祭神三尊

八将神

素盞鳴尊

孤渟姫命

本殿宇賀大明神三尊

稚産霊神

宇氣持神

神殿

入彦名速津彦名茅渟彦

祭日九月十六日十七日

天満宮

宗地に在

祭神一尊



大威神天滿大自在天神

神殿 入式名換言為茅葺

祭日九月十九日廿日

若神社

河内之河

祭神

澳津彦神

澳津姫神

去脚社神

神殿 入式名換言為茅葺

約陸 入式名換言為茅葺

相殿 入式名換言為茅葺

通夜堂 杉行式名梁行言為茅

茅葺

祭日九月十八日

黄幡社

河内之河

祭神二尊

建所名方神 大己貴神

相殿河内社祭神一尊

園象女神



神殿 入三石横計百廿五

社傳

寛文九己酉四月因路國  
都農部長尾村式内二  
候神社より勸請棟札等  
ありし也

祭日 九月九日十日

権現宮 湯中孫次郎社

祭神 三尊

河崎丹尊 速玉男神

菊理媛神

石祠 入三尺横四尺

祭日 九月十二日十三日

地主妻 四瀬より

祭神 二尊

大地主神

神木 松の古樹あり

祭日 九月十三日十四日



大歳妻

月村子乃

祭神二社

大歳神

所歳神

神木

推の木あり

祭日九月十三日十四日

大歳社

板持水月子社

祭神一社

所歳神

神殿式百四両茅葺

祭日九月十日

右十八社

一人抱

黄幡社

大寧寺山に在

祭神二社

建御名方神

大己貴神

本殿八社

伊勢大神宮

往古より隆盛  
祭日九月十六日

妙見社

大寧寺古七五全岩和者代文  
勸誘但大内家



護國神の祭は六月十三日の初詣とあり

天神社の祭は毎月廿五日の初詣

嚴島神社の祭は毎月十六日の初詣は安和の者の代文は福元の辰八月の初詣

十六日の夜嚴島神社正法華護養と安和和善思想を崇め初詣日早矣又空中より赤財天の画像降臨しり小則白蓮池は勸誘聖年六月大早懸の故は雨乞のよめ者為妙陽菩薩と号す血脈を附記和善のよめ方丈へ降るるは又大雨集ると云祭日毎月十七日の初詣

稻荷社の祭は二月初午の初詣

八幡社の祭は毎月十五日の初詣

徳王三所大権現 慶安大権現

秋葉大権現の祭は毎月廿四日の初詣

金毘羅大権現の祭は三月廿六日の初詣

とも十日一年四度宛執行

右相殿と大亭と境内

徳守と之の祭は毎月廿五日の初詣

みくろへともの祭は毎月廿五日の初詣

尚根帳板のよしと

解深社の祭は毎月廿五日の初詣

殿とお成り

神殿 入定石様式百番木替



相殿 武島四万葉齋

祭日 九月十三日十四日

一之宮 湯ノ畑ニ在

祭神 伊弉冉四尊

底筒男神 中筒男神

表筒男神 神功皇后

神殿 武島四万葉齋

祭日 三月廿三日 九月廿三日

當社 四瀬村ニ在

此先年當村ハ社新造

付、但此地ニ温泉守護

の役有社継古より社

多々ハ其先程の御帳

帳板ニ付御帳ニ上り

の通社御付

若神社 大寧寺山ニ在

祭神 三尊

澳津彦神 澳津姫神



土御祖神

お殿

春日大明神 稻荷大明神

神殿 杉江是文 崇江五人七寸

茅葺

祭日九月廿六日より廿八日迄

右三社 大守古抱

若神社 因原亦在

祭神三柱

土御祖神 湯澤姫命

湯澤姫命

神殿 八五尺七寸 横六尺九寸

約五尺八寸 横九尺九寸 葺

お殿 八五尺七寸 横六尺九寸 葺

棟札の字

元禄八乙亥 氏子繁昌 瀬戸崎祖園神主

奉冊與三寶荒神 牛馬息災 宮國右近大夫

八月廿八日 五穀稔満







中祠崇本尊子之觀音 木像  
大庫裡本尊韋馱天 木像  
山門本尊釈迦牟尼佛

阿難尊者 迦葉尊者

十六羅漢 二十四世燈外

大和尚 各木像

禪堂本尊陳如尊者 木像

東司本尊烏頭沙麻王 木像

衆寮本尊藥師如來 木像

藥師堂本尊藥師如來 木像

準提觀音 石像

徑藏本尊博大士 木像

吉祥殿永平道元大和尚像

永懷居士通幻大和尚像

吳山堂石屋大和尚 竹石和尚

定庵和尚 智翁和尚

伯古大和尚 各木像

歷代住持畫像

本堂 柳杉孫三首梁杉孫三首

半檜皮燈籠



中祠堂 杉以五尺梁以四尺  
大庫裡 杉以六尺梁以八尺

茅簷

山門 杉以五尺梁以三尺

檼皮簷

大門 杉以七尺梁以九尺

惣廊中檼皮簷 委之圓子出

右陽廳向普禱所

禪堂 杉以八尺梁以七尺

衆寮 杉以六尺梁以四尺

東司 杉以三尺梁以二尺

鐘樓 杉以三尺梁以二尺

藥師堂 杉以三尺梁以二尺

通用門 杉以九尺梁以八尺

者門寮 杉以三尺梁以二尺

虎溪橋 杉以四尺梁以三尺

徑藏 杉以三尺梁以二尺

吉祥殿 杉以三尺梁以二尺

宗山堂 杉以三尺梁以二尺

智日堂 杉以三尺梁以二尺



方丈 柳江 公名 梁江 四首 同以  
副寺 寮柳 五首 梁江 武進 寺本 塔  
内寮 五首 寺本 同以  
武進 寺本 柳江 六首 梁江 三首 寺本 塔  
玄冥 柳江 寺本 寺本 梁江 寺本 寺本 塔  
小庫 裡 柳江 七首 梁江 寺本 寺本 塔  
典坐 寮 庭 寺本 寺本 寺本 寺本 塔  
者 叔 寮 寺本 寺本 寺本 同以  
侍 衣 寮 柳江 六首 梁江 四首 寺本 塔  
著 宿 寮 柳江 七首 梁江 四首 寺本 同以

約 庭 廊 中 七 藏 因 庭 庭 堀 寺 寺 之 園 庭  
右 一 一 是 寺 自 作 事 所  
殿 石 不 獨 長 三 丈 四 尺 橫 七 尺 寺 塔 了 右

緣記寺中塔書

竊 又 同 記 寺 本 校 了 小 本 別  
大 津 郊 深 川 庄 瑞 雲 山  
大 字 護 國 禪 寺 之 石 屋  
志 梁 禪 師 宗 創 之 塔 地  
又 一 寺 西 海 法 空 庭 日 東 之



廬山とて禪師依止す  
薩摩忍修集院孫氏島  
津忠久の後裔母々河多  
氏貞和改元乙酉七月十  
五日又出生し十六歳とし  
て出家徳方を歴参りて  
終に法を丹州永澄寺通  
和和為又嗣受して元祿道  
元禪師才七世の瑞孫也  
明徳改元庚午嶋津大道

妙高寺を創し之を禱  
して法要を周す  
元甲戌島津元久所資  
の禱を説きて法教を  
入新に福昌寺を建て  
振請を法故に道徳に  
重し之を常に千衆を  
百に無永十五年戊子の  
秋法別惣持寺の禱を  
無し之を恒に之を一其



恒備之薩州と仰らん之  
此時法皇降起し之海陸  
輒く過ると何とて以竊  
山陰道を経る長州と  
る能く豊の大友大軍を  
赤石園と後々大内弘憲  
公と逆逆を徳貞の孫人  
海を渡ると中なり故  
降も又深川の地と稽止  
其の時大内弘憲公降の

道聖を以て稽一城と  
入道深く宗要を問ひ  
城地と降と降の為と  
新と一割を建石と康  
福山大字護國禪寺と云  
手毎又古牒八百貫を  
納き之香積り具之因  
西七里の山井を寄附  
て山内之境致とあり  
為天下の康寧を禱也



う実より魚承十七年庚  
宮の秋也神位より王哉  
あゝ再び薩州福昌寺  
より歸り魚承癸卯の秋  
そ後智翁和尚来り石  
祖の聖跡を興し一徹に  
宗勸を唱ふ以忠公喜  
滑針あり以一日来り云  
此山帝廟より述し神象  
を喧動を魚承故におく

伽藍を移轉すし一と便  
ち智翁と俱に後には  
そ今の境致より至る忽神  
童何れ出陣す茶二椀を  
持て二公より持る二公未  
喫しつゝさるは岸山五  
色の雲を發し溪澗流  
水の声のそしる童子を  
求むる久し此帝瑞の  
ある故に康福を瑞雲



と改め伽藍を今この深川  
より移して佛殿三内僧  
堂庫院一時は落成す  
修へ能く惣持寺と號  
す本末の式を定めて  
智翁和尙僧と住すと  
四年よりして宗寂之法  
定庵和尙法見竹和尙  
の命を願して寺席を  
補ふ時は南園の一宮住

者以神老翁の女を現し  
或は婦人の形を現し室  
より入る法を問ふ一類天  
晴月明也定庵杖を曳て  
後安坐一老翁の磐石の  
上より孤坐するを以て菴  
問曰汝尋常我家より入  
禪を問底ありや老翁  
答云諾と菴其姓名を問  
老翁和歌を以て答云



松風の夢のうらみなく  
是家とむくも今も後  
よしの神と今寺の棲  
西は盤石の世は終る  
住者の安禪石と云は  
菩薩戒を受け後よ  
宗要を竊む意永く未  
定菴和尙信衣を以て附  
属立明神重く老翁の  
身を現しと云曰他日山後

又温泉を涌くは灌頂  
を授りせん是則法乳の  
結恩は酬ひ塔ると云は  
て十丈簾の大龍と化し  
法衣血脈を載り雲よ  
系しと云去る林密震動  
し電雷四よ叢生は後よ  
定庵一宮よ諸しと云は  
内殿の机よ信衣儼然  
と云定菴候り狼極よ



盛り封藏し今本寺に安  
坐せし御行今存在せり  
温泉初塔山は涌出せ  
寺をさると寺下灌漑を  
使ひし合山是を慈子  
温泉移す寺の東は涌く  
山門は近と六七丁墨雲遠  
は遷るといふと毛病を  
治さるゝは験多く四は遠  
九は遠と一衆沐浴を被

は是神祇の賜をの唐祖  
の法力千歳の後は残る  
を於也永享年中大内  
弘忠公和尙の寺風を時  
と敷く精しく大宰の所  
を量しむは山十六年正  
二月十七日檀越弘忠公月  
陸教弘公の爲り新元深  
川の陣は於て戦死す法



號護國寺殿宗翁弘志  
大禪定内靈廟并坐牌  
於今今安在在竹石和志  
檀越の戦死を以て鼓  
を搥て院を退く有偈  
云桑中曾云三宿憲孤  
雲閑卧八雙年一瓶一鉢  
板橋月又向河山石上眠  
由之薩比由林寺の隠  
る于時教弘公重而懇懇

招請する上再三降し得  
止し今再び来て徑山  
に有偈云一錫重来舊  
院中青山不撒昔時翁  
子栽松樹多情緒未對  
云云夕日紅上山色回  
樓里法師日は盛也冥  
木の管頰上杉大江兼弘  
公遠来て冬獨坐終  
偈累を拾出せの法子傳



一竹友和尚は陸奥の子  
とあり茅菴を山中に  
構へて菴を軒と云ふを  
終るまゝ山を出入り法石  
澄江寺殿を岳長棟大  
禪定所廟所并位牌  
を安置し寛正二年辛巳  
十月廿五日竹友和尚  
を豫め衆より告ぐと却  
後五日當り滅を乞ふと

教弘公師の滅を乞ふを  
時と山は冬と未後の  
を問師は神色常のとく  
よしと茶盃奉りて云  
會麼公唯くは師盃を  
教下しと云珍重教弘  
作禮しと菴を軒と云  
師使ち偈を説く寂を  
教弘公衆僧の後と陸奥  
律送は寛正二年乙酉



九月乙酉檀越教弘公  
逝云法号寂雲寺殿大  
基教弘大居士靈痛并  
号牌於今今安並生才  
五代累之權和尙之行和  
和尙の号徒より初陽  
の龍文号より住持を寛正  
二年辛巳の冬毫文の  
一僧晚より至り寺より帰る  
時又瑞鳳殿故兵部侍郎弘

忠公河外の溪橋の邊り  
源望を僧周云胡為り  
今又在る也若云和  
昭日大字の形あり供養  
を致さむ為なりと果し  
て昭日大字の籍あり十  
月十五日進院より弘忠  
云滅後十三日より多進  
り寛正四年癸未の秋丹  
洲永澄寺の籍を以て



進山園堂お後禪徒七百  
餘員となつた大庵其和者  
大宰の序を継ぐ徳藏を  
牧年の後序を合岩純  
和尚より獲る純公進院  
園堂主文昭主宮のま  
方丈を禪拵一雲谷雲  
舟をしつ十境の園を  
壁より畫しむとなつ山内  
より十境の金剛嶺獅子

峰遊仙窟時猿洞虎溪  
橋白蓮池磐石石橋深谷  
樵徑瀑布泉三尖岩と  
云後より象鼻山嶺五老峰  
の二境を添へ十二境と  
成り長亨二年戊申大  
檀越防州瑞福光寺を  
建てる合岩和尚を禱し  
て園堂祝智をすし心昭照  
改元壬子年大宰の序を



嗣子足翁滿和為子讓、  
と瑞瑞光寺より遷り住し  
本所大菴和為を追請し  
て深山寺一社とあり、自  
二後より和とあり、を後  
大宰の法席天南依公  
奇伯殿公助翁扶公毫洋  
鑑公未継て、董公天文己  
酉の秋十三代異雪殊和  
尚請よ、一と席を董

之後二後中、和言翁鑑公  
瑞崇を厚く守成し、而  
石を寄附し、之を衆僧に  
備へ、盛りに法輪を轉し  
天文九年辛亥秋九月一  
日、法鑑公、悲願陶瓦、建寺  
の邊、及、送を、避け、山に入  
り、寂後の示悔を乞ふ  
異雪町、寺に、開示し、之  
著、薩戒の血脈を授く



美隆公甲を岩上と園山  
中の小池に籠り髪を洗  
ひ髪を梳り経書に  
入る端然とて自殺を  
法号純福寺殿瑞雲珠  
天大指土靈廟并志將殿  
り安座せり今寺の側  
甲山岩鬘水池有美隆公  
の従者十七人お供し回  
り自殺す美隆公の嫡子

幼少に思ひ異雪共  
尾法書に籠り乞ふ  
命を救ふと云はれ  
許さざりて殺害す法  
石珠珠童子則美隆公  
の側より埋葬す法時一山  
都に兵火の爲に天  
以異雪寺を捨る衆  
共と差別に遊ぶに時  
毛利元就公送後を伐る



其後公の寃を報し毎公  
異雪和尚を請し之大守  
と仰しむ弘治三年丁巳  
九月報日

之能公義隆公の爲る當  
山依々法苑一子部を稱  
し之七回忌を追終せし  
る薦後之法語考日記の  
詳也異雪席を退し繁  
興榮和尙を繼席を榮隆系

寂の後天正丁丑の春公  
大守

輝元賢公圓翁和尙を  
請し之異雪を請しむ結  
反三百餘衆あり満とあり  
天正癸未九月一日義隆  
公三年三回の忌辰を當  
る

輝元賢公山門を就て大守  
職を設八月廿日より同



廿九日の子に於て二百廿箇の  
諸侶を請へ一子部の  
法花經を誦し一子部公  
父子并錢死供養の法  
靈を追薦せらるる小糸  
拈香法語日記に載り関  
翁序を退し安叟養  
和尙貴雲院和尙鐵村  
龍馬和尙未繼て位職を  
元和二年丙辰四月十七日

大樹公家康賢君薨去時  
了  
秀純賢君当山よ物々  
東照大権現の尊牌を奉  
安し一子部の法華經を  
誦し冥福を修せらるる  
節宗瑞公より位持秩  
村へ續せらる御書千々  
現在也  
秀純公先例より位を承



五百七拾石の地を以て  
山門より寄附せしむる御判  
物系字ありて也後村近  
席の後願室執事和為  
国亮和為徳凡  
和為徳凡

天教よ造一染後系本  
照禪一禪所の號を勅  
一賜ふ寛永九年壬申  
正月廿四日大お願台徳院

殿豊太

秀統賞公の牌を由山よ  
寄セ

東照宮の側よ有安一  
道場を莊嚴し佛交を  
修葺せしむる寛永のる  
大將軍運使を以て徳  
圃の豊候を巡刃せしむ  
運使山よ参りて  
東照宮 急徳院の号牌



をねしは持国鬼と對詠  
きまひりま日別法燭を  
求む國魂を法くふ二偈  
を書し一寄らるる一  
曰山迎運使掃雲霞  
去禪一椀茶燭佛分  
法二法東方日上照山河  
其二茶樹松根産茯苓  
先着兩層結西漢移来  
康福瑞雲起山号廬山

寺大亭運使亦歎し  
曰長門守殿是美最厚  
一先君のそる靈農夕の  
香燈甚可憐なる寔  
又是西海の東叡山あり  
といひて懐中より一小冊  
を出して書記し  
大樹名の書なり又報し  
らんとあり國魂和為示  
寂の後寛因廓和為英



岩雄和尙相繼ぐ屬席  
在寛永十七年庚申春  
二月廿二日住持の英は遊  
ひ殿考法若舊記亦大  
半焼亡を以山和尙の骨  
像法衣歴代の襍福祕  
記考のこ存在を以法  
衣山和尙惣持寺より蜀  
綿の法衣金縷の五條  
衣水晶の念珠黄絹の玉

綴帽子考を寄ぐ山門  
又納ぐ常任物とあるを  
同四月十七日

大檀君當山は物々  
東照宮五ヶの寺忌を依  
し今大殊舎を設らる  
七日の法筵公考の法語  
考旧記は詳也翌年辛  
巳の秋法別惣持寺住持の  
受脚来るとりて山門



後失の時と當り現任英  
岩和者出勅事と法と  
次則先任寛固和者布  
鼓軒より記し之輪任職  
を補ふ事なり其安の未  
英岩和者示寂庚寅午月  
節告訖和者董席立一  
任十年法席立控外傳  
和者又ゆつたて大蘆水  
又近形其文甲辰恭く

台徳院殿三十三回の新  
辰う年云

大禮若山門の徳了梵建を  
嚴飾一大会法を設らる  
拈香法籍昔旧記と詳ふ  
う翌年乙酉四月恭く  
東照大権現奉百の禱辰  
逢子  
大守綱廣公山門の徳了  
大会法を管縁の鼎新と



殿堂廊廡を建てるし再  
び火後の廢壞を起し  
莊嚴の法華堂を寫可  
附し兩州の諸山を禱  
し一子部の法華經を  
誦し眞福を修薦せしむ  
香積法華堂日記を撰ぶ  
う延宝丁巳の夏修永和  
尚示寂院原欣和為序を  
繼ぐ恒山七年の後序

を江表波和為は釋云布  
鼓水は退和をう元徳改  
元戊辰の秋  
吉兆賢公山は登りて  
法要を周子師檀檄積  
相合ふ如き日儒士は命し  
て本山十境の詩を賦せ  
しめ納くは常付物と  
すう江表恒山教を明山  
亮和為癡絶心和為和



継て位祿をむかひし  
立ふる將軍家歴代の  
号牌并 所當家  
洞春寺殿より香雲院  
殿より拾二本の号牌  
香花常は急るとありし  
逐一り載るる此の物  
悟聰妙有香陽院殿の  
靈圓院殿の靈席山より  
徳社立山門毎夜の天災

と違ふといふも大殿三所  
禪堂鉢堂庫院方丈  
鐘樓圓廊及び用山堂  
侍立寮侍衣寮維那寮  
衆寮本司書院禪林は  
在へる諸堂全備と云ふ  
云とありし深山以来歴代  
の位持冬夏の結制上堂  
小参普の法式皆断る  
とありし當山徳古と一



派出世の道場より今申西  
國の天啓祿の旨教通の  
禮文歴こころ存存を  
況九列并き岐對馬路  
長兩國の徳山千う八九  
我山の枝後たるといふと  
も時衰へ運微より今編依  
も世風の陋は慣ひをを  
捨実を志は各自う封疆  
を弁る族本末の序を亂

一 此を避彼は就の弊風  
此時はみく 欽此及申徳の  
後新仰出らへ共別は縁起  
等々故紹光祿の内お考  
書上戸所如件

在歴考 大寧寺の傳記以り  
ありさるとと云文年中大田  
茂隆公御生害のありと寛  
永年中神火山井は入る延焼  
のありと二夜の大災は古記



什物悉く灰燼とありし故ふ  
る一唯此は出江守保の由縁  
書又粗歴位の事跡を載せ  
之進とも凡そ村老の謄記は  
似て古紙古文書の明證とす  
へき物更よむとあしまり南  
寺を鷲頭弘忠の建立とす  
菩提寺と一つの中云進と疑ひ  
河石屋和尙弘忠止揚と進  
永十五年より十七年の比は  
弘忠

と云り鷲頭弘忠南園入部と  
守護代記を考ふるは永享の  
初とあるは二十餘年の違ひあ  
り進と進言頭弘忠を附合  
せしり石屋和尙を序強せし  
りある一誠は石屋弘忠とも  
は助け論と石屋和尙  
実と精待の居基と一と  
稽く止揚と進言和尙  
と一と縁は依り定菴和尙



法地より来りて弘忠より信せら  
るる當りたるも園劇と云ふも  
此より純きて時代お魚一  
事實校ゆり似たり信  
一寺を宗とて脚足を精待  
し一才一二世より立已ら功徳  
を獲るを規則の如くするも  
り僧家の習ひより兩國の中  
法宗派の古寺院なりて石屋  
和尙の宗基と云傳へたるも

十の八九は精待の宗基あるへ  
さうらの定庵の道石をて  
彼は傳へて新羅僧の神  
法延より来りて多し稱脚白猿  
よ遇て温泉涌出を知るを  
奇跡ありて定庵より傳へたる  
毛定菴より傳へたるも定菴  
園基と云ふ故とも云んり實よ  
當寺を宗とて一を定菴とて  
石屋智翁を精待なりんと



云々明證をなげきても臨証  
大平記大寧寺の突焼の條は  
かくまゝの證は極相訪は  
逆敷し之智翁和尙の宗  
基としく龍馬院某七珠万室  
を抛て造營せし佛殿山門  
厨方丈僧堂法堂より  
まへ一字も不殊系と成  
こと方見けし云々

同書長州大寧寺之事と云はる

長州藤河の大寧寺をたて奉陸  
郷切後の時焼失しけり旨  
義長より再建を可と云  
七堂悉く造營せし云々  
抑此大寧寺と申す石屋  
和尙の弟子智翁和尙の宗  
法として佛法繁栄の靈地  
あり昔時石屋和尙云々和  
尙を造り再長門國へ上  
里周回あり又一字の碑



院を起し是も妙宗寺と  
 稱すは是猶此地は遠く  
 しり所は或山の上は雲  
 叢多るを以て此山中  
 伽藍建立之地なるべしと  
 て特目として著す見れ  
 まるべし則今の大宰寺の  
 山頂あり鷲頭某地あり  
 を知るよし志す是下和尙  
 を吾館に請ひ入是地を  
 園基し之を吾檀越と成す建  
 立すべしと云は是とも和尙  
 思ふ子細有と云は然を出  
 資化圃は或西来寺と云  
 寺より志寂しむるを警  
 以某石屋の識言ありと  
 任す伽藍を建立すし  
 和尙を勧請し今某山とし  
 揚雲山大宰寺と云石つけ  
 するなり



ふとある種色とも此書と岩  
圃の香川某の記——この書の  
よそそ緒の殊に多く纏と  
するもて是れはたゞも大穿  
寺の園山を石屋とせしるを  
そ実を得るは似ての事  
此は抄出に於て智翁より後  
定菴より到るて全く宗山を遂  
つゝんと思はるるもよも  
り如く纏し石屋智翁此地

仍脚の在り此の事と靈地  
を相し並つゝんといは法徒記  
の如くある——とも思  
る水と石屋の宗菴の地と  
云と古より法方よりゆえ  
ぬ水とて決然報——又纏  
以弘忠師の為に新又一刹  
を建名て康福山大穿獲圃  
禪寺と云とあるも違つて  
獲圃の師と弘忠死に法号



を獲國古殿と稱しより大  
宰事の舊号より重襲し  
大字獲國とて唱へしある  
一に統る例と常は多く  
ありとあり初めより大字獲  
國と稱せし如く書るに記者  
の疎漏ある一に或は古  
の蒲冠者能取の善提寺の  
一をよとて隅村八幡社の後  
所書司の舊名ゆゑに在しを

善提寺の爲に宗創の如く云  
傳ふると誤あり能取の法  
号大字寺殿と稱せし疑ひ  
あるへりしと云ふに  
所書司の  
舊名の  
一をよと  
て隅村の  
志よ

大字寺とて隅村の南に



在海苑山と号し蒲海曹  
日源公龍頼の著撰寺也  
山七千光烟所今建寺  
の末吉也と云源龍頼の石  
塔堂の後とあり又堂は  
牌あり表は太宰寺道標  
とあり表は天文九年庚子  
六月十三日とあり寺僧云  
古傳ふ法と蒲海曹日源  
龍頼の法牌也と法中絶

しと表五寺よりかけ持  
とせし時表五寺の法持  
表は年號月日を如法書  
付く共云表五寺のよと  
此法牌の写しあり異本  
盛衰記と龍頼と修之  
の修之とあり法堂とあり  
景時とあり龍頼とあり  
修之とあり景時父子三人  
五百余騎とあり修之とあり



押寄江蘇形ハ何ノ場ニ  
小神ニ大石斗ニク居坐リ  
るリ居結引結教ニ示射  
リハリ居寄ニ多ク射殺  
さるニ後矢殺ニ水ニ  
場ニ火ニ掛自害シテ  
こそ共ニ去リ去リ後景  
時檀立轉ハ能形ノ後  
首ニテ操念ニ持テ行  
形形ニ見ニ成ニトあり

其首立此地ノ葬ト云々

未詳

ト云々ト云々ト云々ノありん  
谷所同倉太亭古ノ條ニ  
範頼靈牌面ニ大寧寺殿  
道悟大禪定門神儀表ニ  
範頼公建久四癸丑八月  
ト形付ト云々

トあり又某王寺ノ條ニ  
當寺ニ蒲御曹司能頼卿



の靈牌あり表は大字寺  
道悟表は天文三三と記し  
るは鎌倉志は出ると  
しるも今その牌ありと  
あり

とありて大字寺と能教の  
法号とるはつとすはく三掲  
村ありは曹司の首書は若く  
う能教の首書と云はれは  
大字寺別ちその首書あり

あると疑ひありは似ては鎌  
倉志ありは源村大字寺の牌  
は天文の表書と録は信し  
新く信僧のお供も是れ未  
やうと記すも未詳と疑ひ  
江戸名跡図会に書くは牌  
は鎌倉志は出ると疑  
ひを際して信僧の信造と  
しる著明ありは源村  
ありは事蹟正しと云はる



彼と寺号の同一なるもの  
を依りて是を以て懸念の  
善提寺とすありて歎し  
寺院の同谷と一村一郷の  
内にも社と投擧すべし  
彼は異教を以て古傳教  
の訛謬を正しと云ふ寺  
家と傳ふる所の懸念以て  
忠石屋和尙と違て懸念と  
て石屋と以脚の時伽藍を

建へ寺地を相し置きしり  
或は小庵を結ひ替へ止揚を  
し置しと云ふ存し一後智  
翁と臨を身ぬ寺地を真  
一室菴と云ふ以懸念と違て  
伽藍建立とせし古傳教の  
意は佛の徳教も授ありと云  
一建立の初奈も今之地  
よと遊ると古傳教の如く亦  
るし又山号を以懸念智翁



と問答のち了り密五色  
の雲を簇に希瑞と依て  
康福を瑞雲と改めあり  
と云きと是も若く義隆公  
法号の瑞雲殊天の瑞雲  
を云ふを承るる於思ふに  
又後者の神考禪の奇蹟  
を叙す瑞松庵四世守邦の  
永享十二年日記に拂子  
縁起の文中は全く同じと

とあり其は定巻のことと云きて  
河まを正しとやんと決断し  
又關東の管領上杉大江兼弘云  
とあるも上杉家大江姓を  
稱せんと疑ふと是も謙  
倉大草紙に

上畧憲実足牙子先祖代  
この守なる色ハ此守の色  
その後あるも西國の卦用  
防烟ハ紅脚あり安んそ



の頃中興の大功及威勢  
を中興の初めに振ひし  
都より武衛細川畠山  
の三家ともよき来よなり  
そ家いしきもこのよ金蓮  
合鉄あり一人しよ兵下の  
所後見も時公歌く大功と  
大功も威勢もよき下  
天下の所後見を望む一  
後都よ望む公方の執事

と作の道改道を補佐先  
王を教ふよきとも三家の外  
と執事の例なりよき多  
多望を空しよき過り  
る時憲実入道法然の事  
りよきおなれよ大よ者  
と憲実入道を雲洞菴号  
岩長棟菴号と稱し長所  
國深川大守寺と中今  
中守も移し益湯御



則大内友と憲実の長子  
とあり上杉山内系圖を  
継孫の丸よとのむ桂の幕  
の故を緒と憲実を祖父  
とて崇敬記すなりと  
後大内友部へ上り上杉と  
実末管領の家なる事下を  
續と系圖の執る職も子細  
ありまじしゆと上りまじ  
方よりと禁中へ奏聞あり

以下むその家ありと陽免  
ありと大内友部大夫義興  
初と上杉と緒と系管領  
は後せしむ陽後と名に如  
く叶ひるるを後憲実と  
いふ事ありつと憲実と  
三月六日深川大寧寺より  
御筆ありと

とある上杉憲実の王を継  
傳しとありと大内



某と云く若くは七世全叡  
和尚を本羽の庵より大正  
氏と云傳ふありしを所縁  
の人全叡和尚進山の後承  
恒せし終るはありし終  
を遂ししとのみなるを上杉  
憲実の身年續と記しける  
傳ふと云く歎極くよま禱  
しする教條のなるに疑  
ひしと云く多しと云く四

録は傳記古文書と云く夫は  
を年終へて里人の口傳と  
述する処を集録しけるを  
のなるとあるし

一寺額所刊お額分割ありたる  
記

大宰守恒祿寺年定恒宗珍聖所  
屬と通令兼知事者早寺家尊徳  
串村と云く百指と云く大津郡  
花小田村と云く九斗大津郡



深川庄とるる三百石在出山松寺  
引合ふ出百七拾石地銀之例是  
行院勅封寺後寺石寺為志徳也  
一併抄

右二十一代寛因和尙八世下出判  
物の招實承上成入院

今後継目出判物出地銀出  
左方先出地銀下出後出大和寺  
是之出也 大寧寺十五代後承和

尚不為僧之六七代大寺下承  
衆在知志徳の物存の寺承  
上言の上

了了音 寛因在判

大旨七石及

一寺出持分帳記帳中其  
あり分た記

右因防法被部地串村五百石



又衣對針九帝之合能辨後之清之  
書毫以中張之內自標最長之針事又  
合標標法分也子無終書以指中  
也如也件

串村衣履

良意思

三右白圖判

云々

大寧寺衣判

福泉衣抄書及

林 又三清及

右之大殊約新小田村之內大寧寺衣  
以分坪分能辨後清及也毫之在  
前也如遠無也書外也清之也中  
所定也之為果書也羽衣也也清

衣履

依三清兩判

大寧寺

福泉衣抄書及

林 又三清及

一寺以深川音由指衣之坪付帳







之證文尚存於此

東照權現様所奉朱平出以  
法宗所住之寺作出宮東  
三箇寺皆稱爲新所行也  
於其時代西國之儀之於大  
寧寺是遠之通矣三箇  
寺同様住之可住之皆三箇  
寺より下哉則當山後後十  
八世後村代未勅也  
一右僧錄也勅より付也

權現様所奉朱平可於中之通也  
洲小田原最上寺山嶺和為實  
三箇寺一曰下所之上  
之後八申上兩寺即稱次牙  
而當家江戶所住之寺也  
其時之通也也其後實  
在三寺寺より下哉也  
新 上様所奉 内所用  
又付所奉亦不其稱也  
下哉彼是延行法也



而費去、付 而集尔不終不  
之後追了本表、當時中  
防長所兩國、七僧孫  
七ヶ寺、七所社也

一 薩摩大隅日向誌三ヶ國之  
後、後經古薩州福昌  
寺僧孫本勅、中集西國四  
國之僧孫之、大宰寺、中兩  
寺、七ヶ所社也

一 權規極佛法後、集方出世之

寺院所改、付法寺院及遠  
慈丈故當山十八世、後村和者  
惣持寺之、蘇登、新和、新之出世  
之、後新、新、新也

一 江湖派本勅、佛法、後、西國  
編考、當時、集、東、七ヶ所社也  
中、集、東、編、考、之、時、代、圖  
之、中、集、之、不、中、一、統、新、後、結、也  
故、當、山、後、村、和、者、之、中、集、東  
三ヶ寺、八ヶ所社、就、雙、方、時、代



お互の様又新元計の都々  
張時前実在三ヶ寺と有寺  
院之仕至仕分者遠州の  
可睡鉄と由寺而己此外  
又云々

一寛永十七年辰二月廿二日  
火主之語書核矣此年四月  
亦與權現様所二十五回忌  
の所作言天樹院所造殿  
此所付出款仕多々七日の法

送お勅旨

一同去六月所國所奉以中へ  
當る書物を以本山惣持寺  
より使僧到云々大寧寺再拜の  
儀所叙入云々右使僧昌壽  
寺交永へ三浦七兵衛方  
お對新元計の

一右書物交云の内は去年親  
父守大寧寺宗派僧福  
の禱ありしお紀の処大寧院



山石屋和尙龍文栄山竹菰  
和尙龍文龍文寺交之六  
宰寺の門赤又粉等之西  
國僧孫の儀も石屋一派  
福昌寺大字寺法兩寺ま  
限りあり又付龍門元石  
の通門仕成龍文付心来  
江戸法沙法未女方をも  
即款よ不取成後惣持寺  
より國僧等引申へ新

中越石

一 脚初入國又南寺入院の脚  
後申上の上所と師上物仕  
手始歳書と脚禮代片  
上當込へ 脚下の上所と新  
于時師上物仕石  
一 殿様御参詣の上所と師持  
脚目足証付昆布と上言  
脚の昆布頂載次と七徳志  
并良老の者迄於このる



御月見新御付の於千代御持  
一 御取物兼七役志家宅  
近金子御取新御付御持  
兼七役志家宅近近近  
社御付

一 御取物の御志御持兼  
或志御菓子吸物の御志  
上御持 御取の御志  
御取御新御付

一 高寺御持御持の御持入

院の御志御取代御志  
寺社御取御取御出御  
高寺御持

一 御取代御取御取御持  
一 高寺御取の御取御持  
御持の家臣大谷御持  
御志高寺御持御取御持  
御取御持御取御持御持  
御取御持御取御持御持  
御取御持御取御持御持



仍の御も為持来り又五原  
前と海系為侍りと尚寺  
の古格より尚侍をよまへ申  
る六人薩州より異族の家  
筋千今到り込種代の中  
るより水懐侍

一 經古由山願地の三所莊屋  
彼お勅の家筋の者由由時  
山内兼女柳河願の百段忠右  
清の三子者千今そ中法を

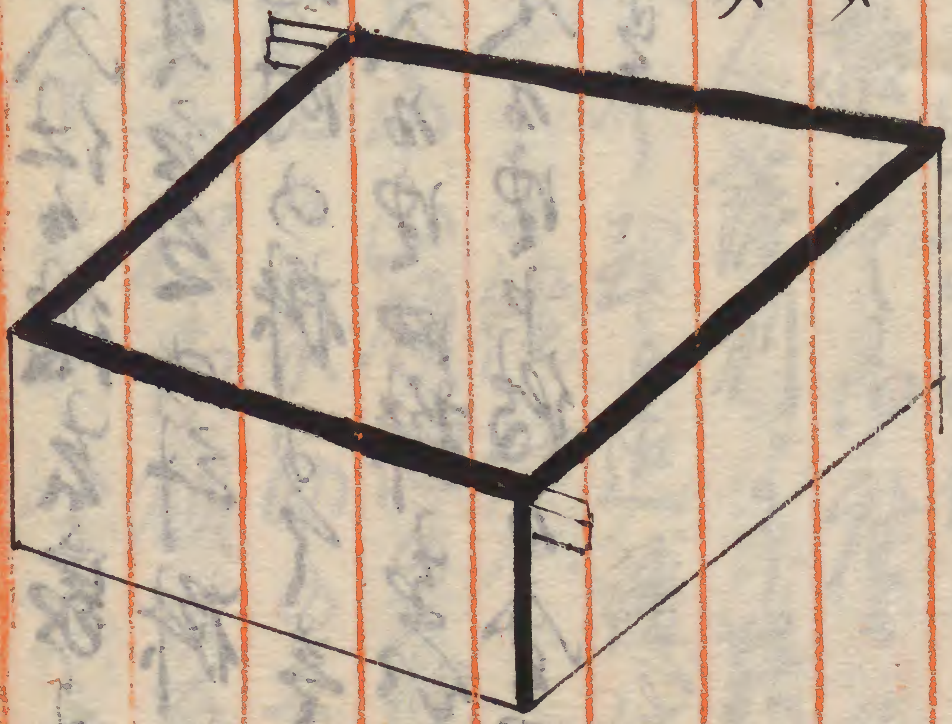
以立入仕の彼名家より初  
年貢なるの斗楨名持仕  
り尚時の楨より斗或令  
五白入り中四楨を以る者  
と定り中と侍り全同なる  
志

御  
御  
御



竪内法 五寸九步

横同 壹丈六步



年沖初交

一正月之旦鶏的、香司火終  
を振へ寺を遠路時方丈  
へ禱代申るの志上布忌  
用よへ若氷を持出家を  
大谷平八鳥帽子素袍  
忌後よへ和尚へ若氷を  
奉らする同日祝儀の  
次第一番の家をの者鴉帽  
袍御持子月々日法布面生



あゝ湯茶の式祓儀等  
の交り二番は思存者  
坐續て彼寮中次は  
才子中惣出家中湯茶  
の式あり三番は寮中  
并禱代の弁る六人次は  
小者五人禱り申るも  
右五淋祓を申候御  
今朝より十一日迄  
今上皇帝室祓云竊

大身公湯武運長久國家  
安令の新禱お勅法式略  
く  
同日大工の弁路の式あり  
同日温泉入初任持掛  
式臺のるもく繼古願地  
の時在屋相勅の家筋  
の志并同百踏折は後  
芸を表白禱り素の上は  
積敵一禱候を伸子



同六日武禱の祈食

同七日恒例の懺法

同十六日結衆送紙今

日より解る

同廿三日の晩より廿四日

午時より

台蓮院殿御証月形法受

勅々

同廿八日恒持堂 城所祈禱

物節之役借五人まぐ

陽月尺新御符

二月朔日より湿簾像並掛

送教経續編目

同十五日湿簾忌法式

三月前入の日徳防火燭

の贖を加持し寺中より

とも紙日火を改む

同朔日肉壇大衆脱冠帽

又衣を露し乞勅紙を

四月朔日初首能入も結別



中の役割

同八日誕生會修り

同十一日露巻修り

同十五日解入恒例の上巻

詰割修り

同十六日の候より十九日の

午時より

東照大権現御祥月法事

略し

五月十日より十一日と至宗

山石屋和者祥月法長の

末山集會し之勤し

六月朔日半夜の御法日

より詰察より涼簾を掛

食時よりお扇守中安

石の留留湯の志あるを

之を教を預

同十五日露巻修り

七月朔日より十日まで

施餼思



同十一日十二日一山中諸塔  
しそ 瓶經

同十五日大施餓鬼

同十六日結衆送經七日

より解る

八月九日十日深川赤湯社

祭礼継古中山の格守

とらしまよらそあまの依

旧例九日の夕に廣く是より

南深浦あり

同廿一日廿二日

廣國院殿御祥月一山限

御四向仕り

廣谷代新三立り

十月廿日教首堂入寺結

割中の役割宗極

同五日遠磨忌

同十二日罷参忌

同十五日解入恒例の上堂

結割法武略



十二月朔日より七日迄切心  
同八日成道會期八のる  
法式累々  
同廿六日餅搗経古より  
三谷の五兵衛と口志杵  
表白ゆづる素草草餅  
昔より納めより餅  
一重米を床に谷八のるを  
生炊  
餅分の追儺と家部志

素袍烏帽子  
お勅禮候の御表  
のふと版は袖の波をま  
ては持并僧衆へ参り  
立まの日は春大旨の續加  
持して守中よる

塔銘

當寺閑山后屋禪師薩州人嶋津氏忠久裔  
也遍参洞濟知識印心于丹之通幻應永十  
七庚寅應就馬頭弘忠請開康福于本州深川



莊應永三十癸卯五月十一日化于丹之永  
澤茶毘分骨塔于永澤福昌吳寧之處  
本傳載諸祖傳刊行序引甚長今此者略銘曰  
悟本再來閑永平 洞宗勃興從北地  
七葉的孫石屋師 本實薩陽姓藤氏  
姓自天宮降世胎 白衣大士現嘉瑞  
才登志學參上乘 九仞之山基一簣  
天下妙善與西雲 命字製說已倒屣  
袈裟泛湖扣永源 趙州無字親揭示  
文殊豈有二文殊 九世志賀莫法施

至誠所感終不虛 粉里俟時含聖旨  
障磨蹈蘆米發揮 時也胡為淹於此  
一錫飄然登丹丘 直見幻翁問生死  
無法外有甚青山 失口即云滿目漚  
師資從此蓋合甬 其闡不可容一德  
千岩之子中峰孫 大拙關左高標置  
相見一笑又亾它 橫榻点茶崇將異  
放包擊寓序都宮 古教照心困則寐  
幻翁澆堂能總持 左右周旋無所墜  
忽付信衣拍其肩 千斤大法於是寄



薩守新開大寶坊 法幢堂、茲頌  
山曰玉龍寺福昌 時昔大聖有懸記  
長州大寧作西來 隨身宮殿自然至  
幻翁幻滅如昨朝 行值三十三回忌  
永澤重開追孝場 多、報恩脩佛事  
殘喘到此無所求 才隔六日鶴林菴  
舍利念珠祭火中 分收永澤福昌寺  
與伏同壽示去來 畢竟都歸第一義  
雪片洪爐電空中 擬討蹤跡徒勞動  
有人橫索讀斯文 翠琰所鐫無一字

永享六年甲寅十月十日

嗣法比丘正猷立



陸奥新田大買物  
山口正能寺藏書  
長州大寺作四本  
町角約敷如赤州  
水幸運朝道安場  
穴常到地無州水  
會到念奉家之中  
興代同書中志未  
臨家五并月書  
百八號之紙五枚十比

十卷  
大田  
大田



上紙共百〇七枚  
又〇枚



